

ベルギーにおけるポピュリズムと 地域主義政党

——フラームス・ブロック（フラームス・ベラング）を中心に——

津 田 由 美 子

目 次

はじめに

1 章 フランデレン政党制の変容とベルギー政治

2 章 フラームス・ブロックと政党政治

3 章 フラームス・ブロック／フラームス・ベラングの展開

4 章 ポピュリスト政党としてのフラームス・ブロック／
フラームス・ベラング

おわりに

はじめに

本稿では、1990年代後半から2000年代におけるベルギー政党政治の変容のなかで、フランデレンの右翼ポピュリスト政党であるフラームス・ブロック／フラームス・ベラング（Vlaams Blok, 2004年以降はフラームス・ベラング＝Vlaams Belang に改称、以下 VB）の成長と停滞を、地域主義・民族主義とポピュリズムとの結合の観点から分析する。

1 章 フランデレン政党制の変容とベルギー政治

(1) 二つの政党制

ベルギーでは、今日に至るまで、強固な政党組織に支えられた政党中心の政治体制（particracy）が存続してきた。戦後続いた多極共存型デモクラシー（consociational democracy）もしくはコンセンサス・デモクラシー（consensus democracy）と呼ばれる「合意の政治」¹⁾は、主要政党間の調整による協調を重視するものであり、主要政党エリート間での交渉と決定は、それらの政党が主に中間団体を經由して多様な社会層の利益を代表しているがゆえに、正当化されてきた。しかし、1960年代末から主要政党の支持率は低下を始める。1950年代には三大政党で90%以上を占めていた得票率は、1990年代には60%台半ばを記録した。地域主義政党が台頭した結果、三大政党は議席数を減らしただけでなく、1970年代末までに組織は地域・言語別に分裂し、全国政党が不在の状況が出現した。それ以降、オランダ語圏とフランス語圏では、すべての政党が地域・言語圏を最大の選挙区として支持を競い合うことになる。それに伴い、各政党の主張は地域の利益を強く反映するものとなり、分裂後の姉妹政党は次第に独立性を強めていった。連邦政府のレベルでも姉妹政党の同調が崩れた現

1) レイプハルト（Arend Lijphart）に代表される多極共存型デモクラシー研究ではベルギーは典型的な事例の一つとされてきたが、歴史的に形成されてきた固有の社会構造の変容が進むことにより、近年では政治決定方式に焦点を当てたコンセンサス・デモクラシーの用語が使われるようになっていく。

在²⁾、地域圏政府への権限の移譲が進むにつれて、国政レベルの政党政治は、やや誇張した表現ながら、地域圏政府レベル（フランデレン・ブリュッセル・ワロニー）で活動する政党間を調整する場として機能しているとも言え、政治に占める比重は低下する傾向にある。

各地域圏の政党政治は、全国政党が存在していた時期から、すでに地域固有の特徴を示していた。以下では、地域・言語の違いに着目し、ブリュッセルを除くフランデレンとワロニーを中心にその特徴を概観する。

フランデレンでは、1980年代まで、第一党としてのキリスト教民主主義政党を中心とした政党制が維持されてきた。フランデレン民族主義運動内穏健派の政治的代弁者であり、キリスト教徒の「包括政党」として、ベルギー議会制民主主義の歴史のなかではほぼすべての期間にわたって政権与党であり続けたのである。この政党は、国家体制の急激な変化を望まず、連邦化には慎重な姿勢を取り続けていた。他方で、フランス語系が作り上げたベルギー国家の枠組みに反対し、オランダ語系の利益実現には再編しないと主張するフランデレン民族主義急進派は、大幅な分権さらにはベルギーからの独立を視野に入れた独自の民族・地域主義政党を組織した。1950年代にフランデレン民族主義運動の支持者を中心に結成された人民同盟（VU）は、1960年代にはフランデレンで支持を伸ばし、全国組織を持つ既成政党を分裂に追い込み、地域対立を政治的に顕在化させて制度改革を余儀なくさせた。しかし VU が1970年代にエフモント協定を承認して与党化すると、フランス語系に譲歩したとの内部批判が強まり、そこから分裂した勢力が VB を結成する。

それに対して、ワロニーで優位を占め続けたのは、社会主義系労働組合と結びついた社会主義政党であった。フランス語圏では第二次大戦前まで、民族主義および地域主義は政治化しなかった。大戦後にワロン連合（RW）が結成されるが、これはワロニー地域の経済的停滞とフランデレンで成長する地域主義勢力への対抗としての地域主義政党であった。フランス語系としての民族意識

2) 2007年の連合政権において、フランス語系社会党の参加に対して、オランダ語系社会党が野党の途を選択したことが、この変化を象徴している。

もしくは、ワロニーのフランス語系アイデンティティは極めて弱いといつてよいであろう。ワロニーの地域主義は、フランデレンのような文化的・歴史的意識に基づくものではない。政治的・経済的に少数派の立場を意識するようになったフランス語系住民が地域活性化のための予算と権限の保障を要求するものであり、その点で既存のベルギー国家の再編よりも、単一国家の枠内での手厚い地域支援を要求するものであった。支持率も1971年を頂点に下降し、一部は社会党に吸収される形で解党した。ブリュッセルで結成されたフランス語系民主連合（FDF）は、ワロニーとは異なるブリュッセルのフランス語系の利益を主張する政党であり、フランデレンとワロニーが主導する連邦制化のなかで、ブリュッセルで多数を占めるフランス語系住民の利益を第一にするという点で独自の存在意義を保っていた。しかし、他の政党が言語利益を主張するようになると支持率は振るわず、1995年からは自由主義政党との選挙協力で政党の継続を図っている。1991年選挙で VB と並んでその躍進が注目された国民戦線（FN）については、地域や言語を要求する運動とは無関係に結成された政党であった。

(2) フランデレンにおける変化

1990年代後半から2010年にかけてのフランデレンの政党政治に注目するのは、この時期がベルギー政治史上の重要な転換期に当たるからである。フランデレン政党政治を中心とする主な変化と重要性は、以下の点にある。

第一は、伝統的な柱組織に基礎を置いた三大政治勢力の後退と政党制の断片化である。すでに述べたように、とりわけ、キリスト教民主主義政党の凋落が顕著であった。国政の中心であり続けたオランダ語圏のキリスト教民主主義政党であるキリスト教人民党（CVP）の低迷は、1999年には決定的な局面を迎えた。常にフランデレンの第一党であり、「合意の政治」の中心として、キリスト教民主主義党はほぼすべての政権に参加し、歴代首相の多くを輩出してきた。しかし、1980年代後半からは支持率の低下が続き、1999年には自由主義政党であるフラームス自由民主（VLD）に得票率で敗北したのち、遂に政権を

離れたのである。他方の自由主義政党は、それまでは社会主義政党に及ばない第三党が定位置であった。しかし、若い世代のリーダーであるフェルホーフスタット（Guy Verhofstadt）を党首として、政党組織の刷新を進め、党員と有権者に開かれた政党として党勢の拡大に成功した。第二党に転落した CVP は、キリスト教民主フラームス（CD&V）と党名を変更し、フランデレンの利益を追求する政党としての路線を強く打ち出すことになった。三大政党の一翼を担っていた社会主義政党は、社会党（SP）から異なる社会党（SP&A.）と改称し、左派勢力の統合を図ろうとするなど、既成政党側の勢力回復への取り組みは組織改革を伴って進められた。

第二に、既成政党の後退は新しい政党の結成・伸長と並行したが、その中で下院に議席を獲得した新政党に限ってみても、その数と種類は増加した。第二次大戦後を代表する新政党は、地域主義政党としての VU であった。1980年代には、新たに環境保護政党（AGALEV、現在は Groen）が成長し、左派政党と競合しつつ議席を拡大した。一方の VU は、1970年代後半の政権参加と地域協定の締結合意を経て、既成政党の批判勢力としての存在意義を低下させた。より強硬な路線をとるグループは VU から脱退し、VB を結成する。さらに VU の新自由主義グループが新フランデレン同盟（N-VA）を組織し、VU 解党後は新しい地域主義政党としての地位を確立していくなど、民族・地域主義政党の多様化がみられたのである。

第三に、フランス語圏では既成政党を中心とした政党制の再編が進むことで、フランデレンの状況との違いが明らかになった。フランデレンでの政党制の断片化と優位政党の凋落とは対照的に、ワロニーでの社会党（PS）の優位は揺るがなかった。かつての三大政党は内部での政策調整や人事面の協力が制度化されており、地域を越えた政党間の交渉と合意は、オランダ語系最大政党キリスト教民主主義政党とフランス語系最大政党の社会主義政党を軸に組み立てられてきた。しかし、地域別の変化の度合いが大きく異なることにより、合意形成における不確実性は増加した。また、言語別に分かれた姉妹政党のそれぞれは、連邦化が進むにつれて選挙区固有の主張を前面に出すことになり、姉妹政

党間の距離は広がった。CD&V の姉妹政党であったフランス語系のキリスト教民主党が、人道民主中道 (CDh) としてキリスト教政党の名称を外したのは、両者の方向性の違いを印象づけるものであった。さらに前述したように、連邦レベルの政権参加に際しても各政党は独自の考えで行動するようになるなど、既成政党間でも地域別の違いが大きくなり、全国レベルの合意形成システムの流動性が高まった。

フランデレンの1990年代は、VB の拡大と CVP の敗北に象徴された。次章以下では、VB に焦点を当てて、ベルギー政治の変容を検討する。

2 章 フラームス・ブロックと政党政治

(1) VB の台頭

1991年下院選挙は、その結果を受けて「黒い日曜日」と呼ばれている。それは、オランダ語圏で VB の議席が激増し、フランス語圏でも FN が議席を獲得することに成功したからである。両政党間には直接のつながりはないが、極右思想をもつポピュリスト政党としての性質を共有するとして、同時期の躍進は民主主義への危機として受け止められたのであった。

VB は、穏健化した VU への不満から、1978年に離党したグループを中心に結成された。そもそもは、フランス語系に対するオランダ語系の利益保護を目的に出発したのであり、外国人移民への問題関心は低かった。むしろこれは、VB が勢力拡大に失敗する過程で「作り出された」政治課題であった。しかし、ひとたびこの争点が主張されると、政策課題の所有者 (issue ownership)³⁾ としての立場を発揮し、従来の地域主義の思想と結合して、党の存在を正当化する主張として展開されたのである。

VU が分裂する直接の原因は、前述したように1977年に結ばれたエフモント協定の受け入れと翌年の政権参加であった。この協定は、ブリュッセル郊外のフランス語系住民への特別措置を認めており、これに反対して VU から離れて設立された諸組織が、1978年選挙で協力したのが VB の始まりである。フ

3) Van Kessel (2015), pp. 20-21.

ランデレン民族主義者を取り込み、反エフモント協定とフランデレンの独立で結集したものの⁴⁾、既成政党が地域主義的政策を採用するにつれてその存在意義を失い、この年の選挙では、下院でわずか1議席を獲得したのみであった。そこで、1980年代後半に党組織の若返りを図ると同時に⁵⁾、フランデレン文化を擁護するという大義のもと、同化しない外国人移民流入に反対する立場を強調し始めた。そもそも、フランデレン主義には、固有の領土と文化を不可侵のものとして尊重する内容が含まれているが、新たに移民に対して国外への送還を含めた厳しい制限を課し、同質的なフランデレンの実現こそが党の目標だと打ち出したのである⁶⁾。また、反移民の主張は一般市民の声であり、移民に寛容な政策を採る既成政党は市民から乖離していると批判した。この路線の変更により、若手の一人であるデウィンテル (Filip Dewinter) の影響力が拡大し、党の方針決定に指導的な役割を担うことになった⁷⁾。

1991年の選挙でそれまでの停滞を覆す勝利をもたらしたのは、この政策の転換であった。1988年に党の本拠地であるアントウェルペン市議会選挙では17.7%の得票率を記録していたが、下院で前回の2議席から12議席に躍進する成果を収めたことで、その勢力拡大を決定的にした。

その後も、連邦・地域・市町村議会レベルで、いずれも支持を伸ばし、下院では議席数こそ前回の18議席から17議席に減りはしたものの、2007年には12.0%の得票率に達した。フランデレン議会では、2004年に24.2%の得票率で

4) 結党時の政党の指針を作成したのは、第二次大戦時のドイツ軍協力に理解を示し、ベルギーからの独立を目指すフランデレン主義活動家でもあったディレン (Karen Dillen) である。この点で、VB は当初、極右政党とみなされた。

5) 1987年には、当時29歳のアネマンス (Gerolf Annemans) が下院議員になり、党青年部を立ち上げて反移民色を強く打ち出すことになった。

6) 国際反人種差別デー当日に開かれた1984年党大会では、若手活動家を中心に、外国人問題が党の重要課題として議論された。この時期から移民の出身国への帰還事業予算が下院に提示されるなど、移民反対政党としての特徴をアピールする動きが活発になる。このことはフランデレン主義運動組織からの独立性を確保することにもなった。

7) 彼は党の指導的な役割を担い続けるが、党首の座には就かなかった。

124議席中最多の32議席を獲得したのである。

(2) VB 台頭の衝撃

VB と FN の進出は、次の二点で既存の政党政治に衝撃を与えた。一つは政治争点としての移民問題を顕在化させたことである。外国人移民の増加と都市部での可視化は、現象としては新しいものではなかったが、ヨーロッパ外とりわけイスラム圏からの移民に対する不安を背景に、移民排斥まで唱える政治勢力の登場と成長は、人権の尊重を自明のものとしてきたベルギー民主主義に対する挑戦ともいえるものであった。VB の母体となった VU も、第二次大戦前のフランデレン主義運動に特徴的な権威主義的要素を備えていたが、外国人の権利の制限を訴える政党が、国政レベルで相当数の議席を獲得するのは戦後無かった現象であった。二つ目は、伝統的な政党間の合意形成のシステムから疎外されていると感じる有権者に訴えて、その動員に成功したことである。VB と FN は、体制政党の政治エリートと一般有権者の対立を前提とし、前者が後者の意思や利益を代表していないこと、一般有権者の真の代表足りえるのは自分たちのみであると主張して支持を集めた。閉じた仲間内で行われる合意の政治とそれを支えてきたエリート批判を、「普通の人々」の不満の代弁という立場で行なうという、ポピュリズムの特徴を示したのである。

もっとも FN は国政に議員を送り出すものの、その支持率は低いレベルに留まり、やがて5%条項を突破できずに組織は事実上活動を停止していく。ワロニーでの既成政党の支持率全体は、環境保護政党 (Ecolo) の成長により減少したが、最大政党 PS と組織再編を果たした自由主義政党、大幅に後退したとはいえ CDh を含め、三大政党の勢力は健在であった。

ワロニーが主に既成政党内での勢力再編であったのに対して、フランデレンでは、VB の伸長が政党制の大幅な再編をもたらした。VB は三大既成政党の支持層から票を獲得し、万年与党のキリスト教民主主義勢力を脅かし、さらに歴史的に民族主義運動の中心地であったフランデレン最大都市アントウェルペンでは他党を引き離す支持を集めた。

しかしながらこの VB の台頭は、フランデレン諸政党とマスメディアにおける拒絶反応を引き起こした。勢力拡大に成功したにもかかわらず、VB は全国レベル・地域共同体レベルを含むすべての政府で参加の機会を奪われた。移民の人権を否定する政党から民主主義を守ることを目的とした「防疫線 (cordon sanitaire)」が設けられて⁸⁾、政権形成交渉過程から VB が排除されたためである。政府への参加をはじめ、主要メディア、とくにテレビの討論番組への参加などには制限がかけられた。2000年のアントウェルペン市議会選挙では30%以上を獲得し第一党になったにもかかわらず、VB を排した諸政党の結束のもと議会運営がなされた。VB は自らの民主主義の正統性を訴えたが、自治体によっては最大政党でありながら、政治交渉の圏外に置かれ続けたのである。

3 章 フラームス・ブロック／フラームス・ベラングの展開

(1) VB 勢力の伸長

1991年選挙で国政に衝撃を与えた VB 勢力は、その後も移民人口の多い都市とその郊外を中心に支持を伸ばし、議席数を増やすことに成功した。この議席の拡大により、VB への政党交付金は増加し、これを活用して党組織の整備も進められた。防疫線は継続したが、ディレンは寧ろこれを VB が政権政党のエリート支配から一線を画する証しであるとして歓迎した。

VB は、イデオロギー面では、「Eigen Volk eerst! (Own people first!)」のスローガンに象徴されるように、フランデレン民族主義、移民排斥主義 (nativism)、ポピュリズムを主な特徴としていた⁹⁾。しかし、どの要素が強く現れるかは、時期により異なっていた。前述したように VU から離党した当初は、国内のフランス語系にオランダ語系フランデレン人を対峙させた、旧来の民族・地域主義政党としての性質が強い。その後は勢力拡大の突破口として

8) これは、AGALEV (後の Groen) からの提案を主要既成政党が支持する形で採用された。

9) VB の特徴については、De Lange, & Akkerman (2012), p. 31. を参照した。ここでは、1980年代後半までの VB は、フランデレン民族主義運動の中でエリート主義的要素を強く持っていたとの分析も紹介されている。

移民問題を政治課題として設定し、移民排斥主義を掲げて拡大する。この展開の過程で、移民増加を放置してきた既成政党のエリートへの不満を表明し、エリートと人民の乖離を主張するなど、ポピュリズム的手法が使われた¹⁰⁾。1992年に発表された「70項目のプログラム」は、これらの要素が組み合わされた政党の綱領である¹¹⁾。これによると、「フランドレン人のためのフランドレン」を実現するために、非 EU 人の移住禁止、あらゆる分野での自国民優先政策の徹底、職のない外国人の強制的国外退去、不法移民の取り締まりの必要性が掲げられている。家族手当や住宅手当で外国人が優遇されているとの強い不満が、移住者への厳しい対応の背景にあった。ベルギーも出生地主義の国籍法を採用しているが、ここで移民として想定されているのは、国籍を持っても文化的・宗教的に外から入ってきた「よそ者」とみなされる、移民3世までを含んでいる¹²⁾。

しかし、反民主主義勢力と名指しされ排除が続く中で、人種差別・人権侵害との批判をかわすべく穏健路線に転じる動きがとられる。70項目プログラムは、外国人の人権を文化の違いを理由に侵害し、イスラム圏への差別を助長し、欧州人権宣言に違反していると厳しく非難されたためである。VB にとって深刻であったのは、反民主主義政党とみなされることで政党交付金の受給資格を喪失する可能性であった。特に強く非難したのは PS であり、反民主主義政党への国庫支出は認められないと主張した¹³⁾。法的措置が VB をさらに窮地に追

10) 興味深いのは、エリート批判において、フランス語系エリートとオランダ語系エリートに向けられる表現は使い分けられており、オランダ語系政治家は弱くて追従的とされているのに対して、フランス語系政治家は狡賢くて傲慢だと非難されていることである。前掲書、p. 32。

11) このプログラムはフランスの国民戦線の党綱領に影響を受けて作成された。

12) オランダ語では、移民3世までを含めて、異文化出身者を指す単語「allochtoon」が使われる。ベルギーのオランダ語圏の移民統合政策においては、この単語が使用されている。他方でフランス語圏では、文化的な観点からの発想は弱く、経済的弱者への政策に移民の問題が吸収される傾向が強い。

13) VB はこの主張を受けて、2001年には党綱領を人権条約に矛盾しない内容に変更した。

い込んだ。2000年には「機会均等と反人種主義のベルギーセンター」が、VB系列の非営利団体の言動を、1981年の反人種差別法違反とする訴訟を起こした。議論の中心はVB党綱領の内容であった。移民の出身地（第一世代の祖国）への出国措置の要請、非ヨーロッパ系の移民に対する特別教育制度、雇用主への特別課税、失業手当や子ども手当の減額など、差別を肯定する内容が含まれていると指摘されたのである。2003年、VBは、移民に同化か帰国かの選択を認める修正を発表したが、翌年に破毀院はVBの関係団体に対し、人種差別と外国人排斥を理由に有罪の判決を下した¹⁴⁾。

この訴訟の途中でVBは政党名をフラムス・ブロックからフラムス・ベラングに変更した。判決の確定により、VBの議員資格の剥奪や公的資金援助が受けられなくなることを恐れた緊急措置であったとみられている。改称直後に公表された基本方針では、党綱領は時代に合わせて修正され実現が難しいものには変更を加えるべきとして、移民の強制送還などの文言を削除し、移民の同化に重点を移した。しかし、反移民戦略の転換は、「防疫線」突破のための反民主主義政党イメージ払拭のレトリックにすぎないという評価が大半であった。メンバーを含め政党組織としては連続性をもち、政党の基本方針は改称前から変わっていないとみられたからである¹⁵⁾。但し、人種主義的な言説は控えられることとなった。反移民政党から再び民族主義そしてポピュリズムの立場を強調した保守政党へと党イメージを移し、幅広い有権者に支持を広げて、「防疫線」の消滅を図ることが目指されたのである。しかし、メディアの場においては他の政党とVB党員が同席することがようやく可能になったものの、政治レベルの「防疫線」は引かれたままであった。

VBが比較的短期間に以上のような路線変更が可能であったのは、新政党でありながら組織面で一から作り上げる必要がなく、VU時代の組織形態を利用することができたという点が大きい。これにより、初期においても組織が整備

14) この経緯については、Erk (2005), p. 494. が詳しい。

15) 党首のファンヘッケ (Frank Vanhecke) も2004年の党大会で、名称は変わったが党のアイデンティティに変化はないと公言した。

されていないがゆえにカリスマの指導者個人に依存するという、新政党が陥りがちな弱点を免れることができた¹⁶⁾。その歴史性からアントウェルペンを中心に組織が形成・整備され、各レベルの候補者リストの作成にも党執行部が強い権限を持っていた。1990年代末からの約10年間は、組織の成熟期に当たるが、政党助成金を活用して党組織の拡大と専門化が進み、宣伝活動が効率的に展開された。

(2) VB 勢力の後退

VB の穏健路線は、2007年の連邦議会選挙を経て、再度修正されることとなった。新しい競合相手となる政党の進出がその原因である。1991年から増加を続けた得票数の減少傾向が現われた。前回の選挙は2004年の地方議会選挙であり、義務投票制といえども単純に比較できないが、このとき下院選挙で獲得した票数は、2004年フランドレン議会選挙で獲得した票数から約22,000票、20%近くの減少となった。VB 票の移動先は、主にデ・デッケルリスト (Lijst Dedecker, LDD) と N-VA であった。

LDD は、2007年にデデッケル (Jean-Marie Dedecker) によって設立された政党である。デデッケルは、有名な柔道選手として活躍したのち1999年に政界入りした。2006年までは VLD に属していたが、2006年に除名処分を受けて新政党を結成する。LDD は、厳しい移民制限政策と法と秩序の尊重、既成政党とメディアを含む既存の体制への批判において、VB とポピュリスト政党としての共通性をもっていた。但し、新自由主義的な性格がより強く、民族主義に根ざした連邦国家の改革よりも経済自由化への関心が強かった。しかし、党首の個人政党としての性質が強く、内部分裂と右の政治空間における他勢力との競合により、2010年の連邦議会選挙では5%を超えられず議席を失った。

それに対して、VB の真の脅威となったのは N-VA であった。N-VA は

16) VB の党組織と権限については、Pauwels & Van Haute (2013), p. 11. 垂直型に整備された構造の唯一の例外として、青年組織の存在が指摘されている。Van Haute & Pauwels (2016), p. 60.

VU の後継者であり、2001年に VU の保守派が中心となって結成された。CD&V との選挙協力により 5 % 条項を克服して議席を獲得し、当初から民主的な保守主義政党として認知された。他方で、フランデレンの独立を視野に入れたフランデレン主義の後継者として地域問題を重視し、フランデレンがフランス語圏の社会主義的政策の犠牲者であるとして、地域への権限移譲や財政問題における変革の必要性を主張した。N-VA はフランデレン民族主義を掲げるが、歴史的なフランス語系への対抗意識と連邦国家移行後に強まった社会経済政策における新自由主義、財政的連邦主義を結び付けることで、オランダ語系のアイデンティティと利益を擁護する立場を明確にした。フランデレンの税収が連邦を経由して、失業率が高く所得水準の低いワロニーに配分されることに強い不満を抱く、オランダ語系有権者を引き付けたのである。2007年選挙の勝利で政権に復帰した CD&V が国制改革に消極的な態度を示すと、2010年選挙では直ちに協力を解消し、単独で候補者名簿を作成して大躍進を遂げた。

穏健路線に傾いていた VB は、N-VA の出現により中道右派の政治空間での競争を断念し、右傾化することで右の空間の支持者を逃さない戦略に舵を切った。歴史的なフランデレンの民族的アイデンティティを強調し、宗教や言語、慣習に至るまでフランデレンの固有性を尊重すべきこととし、移民の同化政策の基準は非常に厳しく設定されることになった。これは事実上、多文化主義の否定であり、強硬派の中心であるデウインテルは、文化の多様性そのものが紛争の原因であるとの見解を表明した。もっとも多文化主義批判の矛先は、イスラム系移民に向けられており、定住しベルギー国籍をもつに至った移民の増加がヨーロッパ文明の浸蝕を招いているとして、初期を彷彿させる攻撃的な言説でのイスラム批判を展開した¹⁷⁾。

しかし、この初期路線への回帰は、選挙においては功を奏さなかった。2012

17) 1980年代の VB は、倫理的には伝統的価値観を重視し、同性愛や女性の社会進出には否定的であったが、イスラム教の価値観を否定するに当たって、ヨーロッパ文明がもつ自由と平等の証明として肯定的な立場を取るに至った。また、ユダヤ人に対しては、新たに第二次大戦時の迫害に反省を示し、イスラムを共同の敵とする民族だと位置づけている。

年の市町村議会選挙においても退潮傾向は止まらず、2014年の連邦・地域議会選挙では、下院では3議席、フランドレン議会でも6議席を獲得したのみであった。党勢の衰退と戦術の失敗は党内の路線対立を増幅し、執行部に対する草の根レベルの反発を誘発して党員の離党が相次いだ。

4章 ポピュリスト政党としてのフラムス・ブロック／ フラムス・ペラング

(1) VB の成功と失速

VB は、国政レベルで一定の支持率と議席数を20年近く維持した点で、ヨーロッパで最も成功した右翼ポピュリスト政党と評価されている。それでは、VB の成功とその後の失速はどのように説明できるのだろうか。ポピュリスト政党に共通する要因と VB 特有の要因の両方から、2007年までの勢力拡大とその後の後退の理由を考察する。

一般的にポピュリスト政党の成功については、有権者側の政治意識などのデマンド・サイドと、政党側の有権者に対する選択肢の提供などのサプライ・サイドとに分けてその要因が分析される¹⁸⁾。

デマンド・サイドについては、大量の移民の存在が社会・経済的脅威として認識されるようになったこと、政治とくに政党に対する信頼感が低下したこと、さらに失業率が増加することで福祉排外主義と結びつきやすい状況が生まれたことが、ポピュリスト政党拡大の背景にあると指摘される。

サプライ・サイドについては、制度的要因として多くの論者が指摘するのが、小政党が進出しやすい選挙制度の存在である。新勢力としてのポピュリスト政党が議席を獲得しやすいのは、比例代表制を採用している場合である。また、政党の競合空間において、有権者が重要だと意識する問題に既成政党が十分に対応していない場合には、新政党の入り込む余地が生まれる。さらに、選挙での成功をもたらすのは、新政党における指導者の役割と組織の凝集性であると

18) ここでの議論は、主に Carter (2005), Mudde (2007), Pauwels (2011), Van Kessel (2015) を参照している。

も指摘される。カリスマ性のある指導者の存在は、短期間での成長にはより効果的である。選挙での動員力の中心は、政党組織が築いてきた中間団体との強固な関係性への依存から、いかに政党の指導者がメディアをはじめとする手段で有権者に指導者として印象づけられるかに変化した。この点では、いずれの政党も程度の差こそあれ、信頼できる指導力のあるリーダーを焦点に人気を獲得する戦術を展開してきた¹⁹⁾。さらにカーター (Elisabeth Carter) が強調するのは、ポピュリスト政党の成功には、反既成政党の立場を明らかにしつつ、あまり極端な立場を取らないこと、ある分野の政策を主導していると有権者に印象づけてメディアの注目を集めることである。

以上の観点から、VB の成功をもたらした要因を検討すると、デマンド・サイドについては、他の西欧諸国と状況にそれほど大きな違いはない。サプライ・サイドについては、制度的にはベルギーでは比例代表制が採用されており、5%条項という要件があるものの、新しい政党が議席を獲得する可能性が開かれている。また、政府の移民・難民に対する規制が緩く、移民の増加やイスラム圏への脅威に既成政党が無策であったとみなされたことで、移民問題をいち早く争点に取り上げた政党は、有権者にその問題についての第一人者だと印象づけることができた。さらに、VU の離党組から結成されたため、前述のように組織面では離脱した前政党の制度を取り入れることができたこと、党指導者が一定の政治的技能を習得していたことなども、成功の要因として挙げることができよう。比例代表制に個人への選好投票を加味した制度を利用して、選挙戦を通じてメディアに取り上げられる指導者像を作り上げることで、党全体のイメージを効果的に広めることができたことも利点にはたらいた。

しかし、2009年選挙では2007年に続いて、得票率と議席数ともに VB の勢

19) ベルギーの選挙制度は比例代表制であるが、政党への投票と候補者個人への投票が組み合わせられており、近年ではどの候補者が最も人気を集めるかが、選挙戦報道の中心の一つとなっている。連合政権が常態であり、首相は政党間の交渉の過程で最終的に決定されるという経緯があるので、選挙結果が首相選出に直接反映されるわけではないが、有権者の意思の確認として近年とくに注目が集まっている。

力は後退した。ここで起ったのは、主に VB から N-VA への票の移動であった。この凋落の原因については、「防疫線」戦術の影響が大きいと指摘されている²⁰⁾。

すでに述べたように、民主主義勢力にとって、VB は自由民主主義への脅威であり、正統で対等な政治主体としては認められないものであった。しかし、VB を排除することは、多様なレベルにおける政権の成立を困難にした。特に言語・地域的少数派を保護すべく定められた特別多数や言語別多数の要件が関わる国制改革においては、VB の排除を前提とした多数派形成は調整を長期化させた。他方の VB 側においては、政策形成過程に参入できないばかりか、メディアの場でも同席できないという不利な立場に置かれたが、エリートと人民の対立軸においては、排除はエリートが人民の意思を顧みない証左だとして、民主主義の体现者としての自らの立場を訴え続けることができた。

このように、政権に接近できないことは、批判勢力としての正統性の維持を可能にした。しかし、この戦術の長期化で政権に関与できる可能性が見いだせない状態が恒常化することで、VB の支持者の態度に変化が生じた。2009年選挙での N-VA への VB からの鞍替えは、より政治的影響力を行使できる民主的選択肢を有権者が望んだ結果であると評価されている。

(2) VB のポピュリズムと地域主義

前述したように、VB は2007年を頂点として後退の局面を迎えたが、20年間以上に渡り地方のみならず連邦レベルでも議席を獲得し続けてきた。この持続性は他国の事例と比べてVBの強さを現わしている。

ポーウェルス (Tenu Pauwels) は、ポピュリスト政党の特徴は、ポピュリズムと多様な思想との結びつきにあると指摘する。現代のポピュリスト政党にみられる主たる結合は、以下の三種類である²¹⁾。第一は、新自由主義と結びついたネオリベラル・ポピュリズムである。現在の政治体制では、「大きな政府」

20) Rummens & Abt (2010), pp. 662-663. Pauwels (2011), pp. 75-77.

21) Pauwels (2014), pp. 12-31.

により特定の組織の利益が保護されており、無駄な出費や政治腐敗を招いていると批判する。既得権益を持たない市民の側からの、政権批判・官僚批判がその特徴である。第二は、社会民主主義と結びついたソーシャル・ポピュリズムである。貧富の格差が拡大する現状を行き過ぎた資本主義の弊害として批判し、国家主導の福祉政策の推進による平等の実現を主張する。貧困層と富裕層との二分法に基づき、労働者層が「普通の人々」の側に立つ²²⁾。第三は、ナショナリズムと結びついたナショナル・ポピュリズムである。国境を越えた人の移動が常態化するなかで、同質的な集団の社会における固有の文化や伝統が失われつつあることを警戒し、それを招いた外国人の流入に寛容な態度を取り続ける政府を批判する。社会の法と秩序の回復のためには、個人の多様性よりも伝統的な集団重視の価値観への回帰が求められ、多文化主義は否定され、外国人排斥運動が正当化される。ポーウェルスが現代ヨーロッパに特徴的だとするのは、この第三のタイプである。彼は、ドイツ、ベルギー、オランダのポピュリスト政党の比較研究を行ったが、そこでは三つのベルギー政党が取り上げられており、LDD が第一のタイプ、VB と FN が第三のタイプに分類されている。

これまで見てきたように、VB は分離元の VU とともにフランデレン民族主義の土壌で醸成された政党である。フランデレン民族主義は、それ自体が可変性をもち、第二次大戦後に限っても、フランス語系とオランダ語系との対等な地位の実現から、固有の民族文化を守るためのフランス語系との分離・独立の主張まで、政治的・経済的・文化的環境の変化に対応しつつ展開してきた。政治勢力としての地域主義政党は、他地域と比べてフランデレンで高い支持を集めてきた。連邦制移行後も、フランス語に対する少数派意識ゆえに、フランデレンにおける文化的同質性を防御すべきだとの主張は、歴史的経緯から正当化され一定の政治的動員力を保っている。VB の訴える外国人排斥やオランダ語文化への同化は、非民主主義的だと批判されながらも支持を集める主張だった

22) 両者には相容れない点があることも指摘されている。その一つは、産業化社会の発展とともに労働者が減少し、「普通の人々」を社会主義が重視していた労働者層に限定することができないという点である。

のである。しかしながら、地域主義政党としての立場を前面に出して登場した、VU の正式な後継者である N-VA との競合は、非民主主義的政党との烙印を押された VB から支持者を奪うことになったのである。

(3) フランス語圏との比較

ポピュリズムは、現状の政治勢力に対する強い不満や不信を背景に成長すると言われる。しかし、フランデレンにおける政治不信は、ベルギーの他地域と比べて高いという訳ではなく、むしろ、ワロニーのほうが強く意識されている²³⁾。また有権者の政治的選好についても、フランデレンがワロニーに比べて右寄りだという調査結果は出ておらず、右翼ポピュリスト政党がより成功しやすい環境が整っていたとは必ずしも言えない。外国人に対しても、フランデレンよりもワロニーにおいて否定的態度を示す傾向がみられる²⁴⁾。

このように、デマンド・サイドにおいては相対的にワロニー側に好条件が揃っていたにもかかわらず、FN は弱小政党のまま衰退した。フランデレンとの違いを生み出したのは、サプライ・サイドにおける政党の対応である。ワロニーの政党制は、最大勢力の PS が左の政治的空間を支配し、その一角に環境政党としての Ecolo、右には PS に次ぐ勢力としての自由主義政党である改革運動 (MR)、中道に CDh が位置していた。歴史的に民族主義運動が発達せず、また地域のアイデンティ形成は経済的衰退に伴う地域間格差への懸念からであったワロニーにおいて、組織力を持たない FN のポピュリズムは、既成政党の支持基盤を崩して拡大することはできなかった。ポーウェルスのポピュリズムの分類に従うなら、ワロニーの有権者の状況から最も効果的なサプライヤーと考えられるのは、ソーシャル・ポピュリズムであった。産業構造の変化に対応できずに国際的競争力を失い、海外からの投資はフランデレンに集中した。ワロニーの失業率は増加し、一人当たりの平均所得はブリュッセルを含む

23) Pauwels (2014), p. 174. 2014年選挙時のデータは Vermeersch (2014) も参照した。

24) Coffé (2005b) P. 86. Table 3 参照。

三地域で最低である。国制改革の政治過程においては、ワロニーへの財政援助の再配分に反対するフランデレンから、財政的連邦主義の強い圧力を受け続けてきた。VB が文化的伝統を核とした地域意識に訴えて、既成の政治体制のエリート批判を効果的に展開したのに対して、ワロニーの有権者の関心事であり最大の政治争点は経済問題であった。この争点は新しいものではなく、そこでの議論の主導権は既成政党にあり、最大政党の PS がその中心を占めた。PS は、VB と FN が国政に進出した1991年から1995年にかけて、政治的立場を一層左に移すことで他の政党との違いを明らかにし、社会民主主義政党の立場を強調した²⁵⁾。また、PS の「権力の遺産 (power legacy)」が、政治空間における伝統的な左右軸を有効にし、既成政党勢力の安定を可能にしたことも指摘されている²⁶⁾。その結果、政党から中間団体が離れたフランデレンに比べて、労働者組織との関係性を維持した PS の政治的優位は続いた。この点で、既成政党批判を掲げるポピュリズム新勢力進出の可能性は限られていたのである。

おわりに

本稿では、フランデレンの VB の展開を中心に、ベルギー政党制におけるポピュリスト政党の特徴を明らかにしようとした。VB は民族主義の伝統のうえで、連邦国家における地域主義と固有の文化の尊重を、外来の異質な文化の排除という方法で強調しようとした。VB の成功は、既成政党が取り上げなかった外国人移民の問題を政治問題として提示し、それについての主導権を握りながら、民族主義的文脈で解釈しようとしたところにある。

現代ポピュリズムを後押しするのは、グローバリゼーションに直面する市民の政治不信の深さであり、各国において既得権を握っているとみなされたエリートへの激しい批判である。しかし、同じベルギー国内においても、政治不信が際立って強いとは言えないフランデレンでは、ポピュリスト政党の進出が既成政党に影響を与え、政党制の変容をもたらした。他方で、フランデレンよ

25) Coffé (2008), p. 190. Figure 2 参照。

26) Coffé (2008), p. 188.

りも政治不信が強いとされるワロニーでは、ポピュリスト政党が政党制に与えた影響は限定的である。本稿ではサプライ・サイドに着目して、その違いを考察した。但し、ポピュリズムとしての VB 現象がもつ意味は、フランデレンの歴史的文脈のなかでこそ考察されるべきである。なぜなら、ナショナリズムとポピュリズムという二つの持続的で可変的な思想が、どのように結びついて政治勢力として成長したのかを解明することが、現代政治を考えるうえでとりわけ重要であると思われるからである。

参 考 文 献

- 古賀光生「戦略、組織、動員（一）～（六）」『国家学会雑誌』第126巻、第5・6号～第127巻、第3・4号。
- 日野愛郎（2014）「オランダ・ベルギー」網谷龍介・伊藤武・成廣孝（編）『ヨーロッパのデモクラシー』ナカニシヤ出版。
- 松尾秀哉（2010）『ベルギー分裂危機 その政治的起源』明石書店。
- 松尾秀哉（2015）「「ベルギー分裂危機への道 — フランデレン・キリスト教民主主義政党の党改革」吉田徹編『野党とは何か』ミネルヴァ書房。
- 水島治郎（2014）「ポピュリズムとデモクラシー」『千葉大学法学論集』第29巻第1・2号、pp. 125-147。
- 水島治郎（2015）「「民衆の代表」か「防疫線」か — ベルギー・フランデレンのポピュリズム政党」『千葉大学法学論集』第29巻第4号、pp. 1-25。
- 水島治郎（編）（2016）『保守の比較政治学』岩波書店。
- Adamson, Kevin & Johns, Robert (2008) “The Vlaams Blok, its Electorate, and the Ideological Articulation of ‘Europe’”, *Journal of Political Ideologies*, 13 (2), pp. 133-156.
- Art, David (2008) “The Organizational Origins of the Contemporary Radical Right: The Case of Belgium”, *Comparative Politics*, 40 (4), pp. 421-440.
- Carter, Elisabeth (2005) *The Extreme Right in Western Europe, Success or Failure ?*, Manchester University Press.
- Cofeé, Hide (2005a) *Extrem-right in Vlaanderen en Wallonië*, Roularta Books.
- Cofeé, Hilde (2005b) “Do Individual Factors Explain the Different Success of the Two Belgian Extreme Right Parties”. *Acta Politica*, 40 (1), pp. 74-93.
- Cofeé, Hilde (2005c) “The Adaptation of the Extreme Right’s Discourse: the Case of the Vlaams Blok”, *Ethical Perspectives: Journal of the European Ethics Network* 12 (2), pp. 205-230.
- Cofeé, Hilde (2008) “Social Democratic Parties as Buffers against the Extreme Right:

- the Case of Belgium”, *Contemporary Politics*, 14 (2), pp. 179-195.
- Cofeé, Hilde, Heyndels, Bruno & Vermeir, Jan (2007) “Fertile Grounds for Extreme Right-Wing Parties : Explaining the Vlaams Blok’s Electoral Success”, *Electoral Studies*, 26 (1), pp. 142-155.
- De Cleen, Benjamin (2013) “The Stage as an Arena of Political Struggle : The Struggle between Vlaams Blok /Belang and the Flemish City Theatres” in Wodak, Ruth, KhosraviNik, Majid & Mral, Brigitte (eds.) *Right-Wing Populism in Europe : Politics and Discourse*, Bloomsbury.
- De Lange, Sarah L. & Akkerman, Tijske (2012) “Populist Parties in Belgium : a Case of Hegemonic Liberal Democracy ?” in Mudde, Cas & Kaltwasser, Cristóbal R. (eds.) , *Populism in Europe and the Americas : Threat or Corrective for Democracy ?*, Cambridge University Press.
- De Lange, Sarah L., Akkerman, Tijske & Rooduijn, Matthijs (eds.) (2016) *Radical Right-Wing Populist Parties in Western Europe : Into the Mainstream ?*, Routledge.
- Delwit, Pascal (2012) *La vie politique en Belgique de 1830 à nos jours*, Éditions de L’Université de Bruxelles.
- Delwit, Pascal, Pilet, Jean-Benoît & Van Haute, Emile (eds.) (2011) *Les partis politiques en Belgique*, Éditions de L’Université de Bruxelles.
- Deschouwer, Kris (2009) “The Rise and Fall of the Belgian Regionalist Parties”, *Regional and Federal Studies*, 19 (4-5), pp. 559-577.
- Deschouwer, Kris (2012) *The Politics of Belgium : Governing a Divided Society*, Palgrave Macmillan.
- Devos, Carl (ed.) (2014) *België 2014, Een politieke geschiedenis van morgen*, Borgerhoff & Lambergts.
- De Winter, Lieven (2004) “The Vlaams Blok and the Heritage of Extreme-Right Flemish-Nationalism”, Conference paper at Sabadell Universitat (5-6/7/2004),
- Erk, Jan (2005) “From Vlaams Blok to Vlaams Belang : The Belgian Far-Right Renames Itself”, *West European Politics*, 28 (3), pp. 493-502.
- Faniel, Jean (2014) “La défaite du Vlaams Belang : une bonne nouvelle en Europe ?”, Les @nanalyse du CRISP en ligne (2014/8/12 アクセス).
- Heinisch, Reinhard & Mazzoleni, Oscar (eds.) (2016) *Understanding Populist Party Organization : The Radical Right in Western Europe*, Palgrave Macmillan.
- Jagers, Jan & Walgrave, Stefaan (2007) “Populism as Political Communication Style : An Empirical Study of Political Parties’ Discourse in Belgium”, *European Journal of Political Research*, 46 (3), pp. 319-345.
- Lucardie, Paul, Akkerman, Tijske & Pauwels, Tenu (2016) “It is Still a Long Way from Madou Square to Law Street”, in De Lange, Sarah L., Akkerman, Tijske & Rooduijn, Matthijs (eds.), *Radical Right-Wing Populist Parties in Western*

- Europe : Into the Mainstream ?*, Routledge.
- Meguid, Bonnie M. (2005) "Competition Between Unequals: The Role of Mainstream Party Strategy in Niche Party Success", *American Political Science Review*, 99 (3), pp. 347-359.
- Mudde, Cas (2007) *Populist Radical Right Parties in Europe*, Manchester University Press.
- Mudde, Cas & Kaltwasser, Cristóbal R. (eds.) (2012) *Populism in Europe and the Americas : Threat or Corrective for Democracy?*, Cambridge University Press.
- Odmalm, Pontus (2011) "Political Parties and 'the Immigration Issue': Issue Ownership in Swedish Parliamentary Elections 1991-2010". *West European Politics*, 34 (5), pp. 1070-1091.
- Pauwels, Tenu (2010) "Explaining the Success of Neo-liberal Populist Parties: The Case of Lijst Dedecker in Belgium". *Political Studies*, 58 (5), pp. 1009-1029.
- Pauwels, Tenu (2011) "Explaining the Strange Decline of the Populist Radical Right Vlaams Belang in Belgium: The Impact of Permanent Opposition". *Acta Politica*, 46 (1), 60-82.
- Pauwels, Tenu (2014) *Populism in Western Europe, Comparing Belgium, Germany and the Netherlands*. Routledge.
- Pauwels, Tenu & Van Haute, Emile (2013) *The Party Organization of Vlaams Belang*, CES Conference paper (Amsterdam, 25-27 June)
- Poznyak, Dmitriy., Abt, Koen, & Swyngedow, Marc (2011) "The Dynamics of the Extreme Right Support: A Growth Curve Model of the Populist Vote in Flanders-Belgium in 1987-2007". *Electoral Studies*, 30 (4), pp. 672-688.
- Rummerns, Stefan & Abts, Koen (2010) "Defending Democracy: The Concentric Containment of Political Extremism", *Political Studies*, 58 (4), pp. 649-665.
- Super, Betsy (2015) "Goldilocks and the Entrepreneurs: Mainstream Party Strategies on Immigration in Flanders and the Netherlands", *Acta Politica*, 50 (4), pp. 417-441.
- Swyngedow, Marc & Gilles, Ivaldi (2001) "The Extreme Right Utopia in Belgium and France: The Ideology of Flemish Vlaams Blok and the French Front National". *West European Politics*, 24 (3), pp. 1-22.
- Van de Brug, Wouter (2004) "Issue Ownership and Party Choice". *Electoral Studies*, 23 (2), pp. 209-233.
- Van Haute, Emile & Pilet, Jean-Benoit (2006) "Regionalist Parties in Belgium (VU, RW, FDF): Victims of Their Own Success? ". *Regional and Federal Studies*, 16 (3), pp. 297-313.
- Van Haute, Emile & Pauwels, Tenu (2016) "The Vlaams Belang: Party Organization and Party Dynamics", in Heinisch, Reinhard & Mazzoleni, Oscar (eds.), *Understanding Populist Party Organization: The Radical Right in Western*

- Europe*, Palgrave Macmillan.
- Van Kessel, Stijn (2015) *Populist Parties in Europe: Agents of Discontent?*, Palgrave Macmillan.
- Vermeersch, Wim (ed.) (2014) *Belgian Society and Politics 2014: Behind the Landslide Elections of May 2014*. Gerrit Kreveld Foundation and Samenleving en politiek.
- Wauters, Bram (2005) "Divisions within an Ethno-regional Party: The *Volksunie* in Belgium". *Regional and Federal Studies*, 15 (3), pp. 329-353.
- Wodak, Ruth, KhosraviNik, Majid & Mral, Brigitte (eds.) (2013) *Right-Wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, Bloomsbury.

* 本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究（B）「ヨーロッパ保守政治の構造変容・保守主義・キリスト教民主主義・新右翼」（研究課題番号：25385038，研究代表者・水島治郎）による研究成果の一部である。